

被災地におけるスタディツアーが参加者の抱く訪問先への愛着に与える影響 - 農学部学生を中心とした福島県飯舘村訪問を事例に -

The Relation Between Characteristics of Participants of Study Tour and Their Attachments

蛸谷 夏海*・杉野 弘明*・溝口 勝*

*Natsumi EBITANI, Hiroaki SUGINO, and Masaru MIZOGUCHI

1. 背景・目的

東日本大震災によって被害を受けた農業・農村地域の復興が進んでいるといわれる一方で、被害への理解が風化していると感じる人が年々増加している。しかし、震災を一過性のものとして終わらせるのではなく、将来の教訓とし、復興後の発展をさらに推進していくためには、被災地外の人々に地域の魅力を伝えて交流の機会を設けること、現場の実情や当時の様子を正しく伝え、ともに未来を考えることが重要である。

溝口 (2019) は、こうした考えのもとで主に学生を対象とした放射線教育や現場でのスタディツアーを開催してきた¹⁾。また、西脇ら (2018) は、福島県飯舘村にて開催された現場見学会および稲刈り体験を取り上げ、実際に現場に行き見聞きすることの重要性を指摘している²⁾。しかし、これらはあくまで実施者の主観的な報告や事後の簡易的なアンケートに留まっている。本研究は、こうしたスタディツアーが参加者の抱く訪問地域への印象に与える影響について定量的な分析を行い、スタディツアーの開催意義や効果について検証することを目的とした。

2. 調査の概要

2018 年 10 月と 11 月に、福島県飯舘村を訪問地としたケーススタディとして、1 泊 2 日のスタディツアーを計 3 回実施した。対象は国内の国公立大学の大学生および大学院生計 44 名である。対象者に、ツアーの開催直前および 3 ヶ月後に質問紙をメールで送り、返送してもらった。回収率は事前アンケートが 41/44、事後アンケートが 39/44 である。ツアー前後の変化を検証するため、事前、事後どちらか一方のみに答えた参加者の回答は除外して分析した。

3. 質問項目

本研究での質問項目は表 1 の通りである。このうち、自由記述によって回答を得た 1, 2 については、水島 (2018)³⁾、古賀・岩崎 (2018)⁴⁾の方法を参考に、KH Coder を使用し、頻出後の抽出と共起ネットワークの作成を、3 については因子分析を行ったうえで事前事後の結果を比較した。なお、共起ネットワークは全回答中に 3 回以上出現した語の組み合わせを抽出して作成することとした。

表 1 質問項目

Table 1 Question items

	事前	事後
1	飯舘村来訪に向けて、楽しみにしていることなどがあれば、以下の欄に自由に書いてください。	3 か月前に飯舘村を訪れた際の、率直な感想などがあれば、以下の欄に自由に書いてください。
2	現在の飯舘村が持っている魅力や課題について、現在知っていることを、5 つ以内でできるだけ多くお書きください。	
3	次の質問に対して、あなたの考えをお伺いします。「7. とてもそう思う」を 1 番高いもの、「1. 全くそう思わない」を 1 番低いものとして、最も当てはまるもの一つを選択肢し、該当する枠の中に○をつけてください。	
	① 飯舘村に自分の居場所がある気がする	
	② 飯舘村の近くは住みやすいと思う	
	③ 飯舘村の近くにずっと住み続けたい	
	④ 飯舘村ではリラックスできる	
	⑤ 飯舘村の雰囲気や土地柄が気に入っている	
	⑥ 飯舘村が好きだ	
	⑦ 飯舘村には無くなってしまおうと悲しいモノやコトがある	
	⑧ 飯舘村は大切だと思う	
	⑨ 飯舘村にはいつまでも変わって欲しくないモノやコトがある	

4. 結果と考察

(1) スタディツアーへの期待と感想

事前の質問紙調査と事後の質問紙調査において抽出語数は増加した。また、頻出語から共起ネットワークを作成したところ、事前調査では「飯舘村、現状、知る」「大学、交流、方々」「食べる、られる」などのクラスターが生成され、事後の質問紙調査では「復興、進む、実感」「土壌、積み、上げる、見る」「自然、豊か」などのクラスター

*東京大学 (University of Tokyo)

キーワード (Keywords) スタディツアー (Study tour), 農村交流 (Rural exchange), 地域愛着 (Place attachment)

が作成された。

ここから、スタディツアー開催前には被災地の現状を知ること、他大学、地元の人々との交流、地元食材を食べることを期待していた参加者が多かったと考えられる。東北地方から遠い大学の参加者も多く、初めての被災地訪問で現状を学びたいという意見が多かったと考えられる。開催後の感想としては、現場での復興活動について見聞きしたこと、豊かな自然があることといった比較的ポジティブな感想がある一方で、汚染土壌の積み上げや原発事故の被害がいまだに残っている、というようなネガティブな感想も多くみられた。ただし、開催後の感想は開催前に比べてより具体的な事柄に言及しているものが多く、スタディツアーを通し、訪れた地域に対して具体的なイメージを持った参加者が多かったと考えられる。

(2) 飯舘村について知っていること

事前の質問紙調査と事後の質問紙調査において、抽出語の数は増加した。また、頻出語から共起ネットワークを作成したところ、事前調査では「風評、被害」「飯舘、牛」「原発、事故」などのクラスターが作成された。事後調査では、「汚染、土壌」「星、きれい」などのクラスターが作成された。事前、事後に共通するクラスターとしては「除、染」「飯舘、牛」があった。

ここから、スタディツアー実施前後で「除染地域であること」「飯舘牛ブランドが存在すること」の印象の強さは維持されており、さらにツアーを通して実際に見聞きした事柄の印象が強く残っていることが示唆される。特に、「星」「汚染土壌」については事前アンケートにおいてはほとんど言及がなかった単語である。比較的街中の出身者が多かったため、当日の満天の星空が印象的だったこと、これまでに被災地を訪問したことのなかった学生が多かったため、フレコンバックに詰められた汚染土壌のインパクトが大きかったことが考えられる。

(3) スタディツアー実施前後の飯舘村に対する地域愛着について

表1の3の9項目について、因子分析を行ったところ、「居住地としての村の魅力」「くつろげる空間としての魅力」「具体的なモノやコトへの愛着」の3因子が抽出された。これらについて、スタディツアー実施前後の得点の平均を比較するとほぼすべての項目で事後調査の得点が高くなっていた。このうち、統計的にも有意であった

ものは6項目であり、特に「くつろげる空間としての魅力」を構成する3つの質問回答は全て有意であった。このことから、スタディツアーによって参加者の飯舘村への愛着心は向上したと言える。

5. まとめ

参加者は村内ツアーを通して、被災地の現状や復興の過程について具体的に知ることができ、訪問前に持っていた学習ニーズを充足することができた。また、訪問前は「被災地」に行くことに対して多少の不安を覚えていても、実際に訪れて自分の目で見聞きすることで、具体的で正しい知識を身につけることができ、不安が払拭されたとともに居心地の良さや事柄への愛着心が芽生えたと考えられる。このことから、本スタディツアーはその地域の知識や様子を参加者に伝え、地域愛着を高める効果があったと言える。

謝辞

本研究は2018年度学術研究活動支援事業（大学等の「復興知」を活用した福島イノベーション・コースト構想促進事業）の助成を受けて実施いたしました。

参考文献

- 1) 溝口勝：「飯舘村関連の講義」, <http://www.iai.ga.a.u-tokyo.ac.jp/mizo/edrp/fukushima/Iitate-lec14.html>, (参照2019年2月8日)
- 2) 西脇淳子・徳本家康・坂井勝・加藤千尋・廣住豊一・渡辺晋生・塩澤仁行・溝口勝(2016)：復興農学事業における福島県飯舘村での稲刈り体験・現場見学会, 農業農村工学会誌, 86(1), 31-34.
- 3) 水島智史(2018)：テキストマイニングによる園芸を学習している高等学校生徒を対象とした園芸生産現場におけるインターシップの教育効果の分析, 園学研, 17(2), 231-236
- 4) 古賀和子・岩崎寛(2018)：テキストマイニングを用いた緑の癒し効果としての感情体験の抽出, 環境情報科学 学術研究論文集, 32, 269-274